

# 老舍研究会会報 第15号

胡絮青女士 題字

## 胡絮青先生を追悼して

舒乙先生

胡絮青先生ご逝去の報に接し、わたくしたちはかけがえのない人を失った悲しみを噛みしめております。

胡絮青先生はすぐれた画家であり、また世紀を生きぬいた歴史の証人でもありました。そしてなによりも作家老舍を支え、老舍文学を老舍文学たらしめるため、さらには老舍文学の理解を深めるために、多大の貢献をなされた人でした。老舍文学の読者も研究者も、胡先生からどれほど多くのものを与えられたか計り知れません。

日本老舍研究会は発足以来、研究会も個々の会員も、胡先生からあたたかいご支援を受けてきました。わたくしたちはこのご恩をいつまでも忘れることはないでしょう。ここに心よりお礼申し上げます。

舒乙先生、ご家族の悲しみはひとしおでしょう。が、どうぞその悲しみにたえて、くれぐれもご自愛くださいますよう。

みなさまの平安をお祈り申し上げます。

2001年5月28日

日本老舍研究会  
(代表委員 杉本達夫)

舒乙先生

得知胡絮青女士的逝世，我们因失去了无比重要的人物而感到极大的悲痛。

胡絮青女士是个杰出的画家，也是个活过一个世纪的历史证人，尤其是个支持作家老舍，为使老舍文学成为老舍文学，并为深化老舍文学的理解，做出极其重要的贡献的人。老舍文学的读者和研究家从她得到的帮助，是不可估计的。

我们日本老舍研究会成立以来，研究会和个别会员也都一直承蒙女士的热情关怀。我们永远不会忘掉其恩情，此衷心表示深厚的感谢。

舒乙先生，你们必定哀伤极了，但希望抑制哀痛，多多保重。

敬祝你们

平安！

2001年5月28日

日本老舍研究会  
(代表委員 杉本达夫)

## 老舍夫人胡絮青女士を偲んで

中山時子 平松圭子

5月21日老舍夫人胡絮青女士が亡くなられた。享年96歳、ご長寿であった。

日本で老舍研究会が結成されたとき、祝辞(会報第1号)と会報の題辞を贈ってくださいました。日本から老舍文学愛好者や研究者が北京の

故居を訪問すると、必ず親しく迎えてくださり、女士の温顔は忘れがたい。今年3月末、老舎を読む会が湯島聖堂の講習会で老舎作品を読み始めてから50年になるのを機に、中山は老舎が愛してやまなかった北京で、しかも老舎夫人胡絮青女士がご健在のうちに、女士をお招きしての記念祝賀会を北京で催したいと切望した。中国対外友好協会はこの私の願いを快諾して下さり、友協の講堂にて盛大な祝賀会を挙行し、同時に学術討論会をも開催して下さった。またその翌日には現代文学館にて、舒乙氏主催の祝賀会及び学術講演会と午餐会が開かれた。午餐会では舒乙氏ご自慢の魯菜（山東料理）をふるまってくださった。中山は胡絮青女士と同席し、楽しいひとときを過ごさせていただいた。女士はこのような会合に出席されるのは久しぶりのご様子で、ご自分の健康法を紹介されたり、ナマコのお料理をたくさん召し上がったりしておられた。このとき女士は「祝老舎読書会成立五十周年 九十七歳 胡絮青」と、大きな紙に手ずから一字一字書かれた祝辞を贈って下さり、我々を祝福して下さった。これが女士との今生の別れにならうとは、誰が予想したであろうか。

1978年6月に老舎の追悼会が行われて文革中の汚名がそそがれると、胡絮青女士をはじめ舒濟女士、舒乙氏等一族を挙げて、老舎の長年に渡る執筆活動で書かれた膨大な量の随筆や評論、詩文、友人への書簡といった資料の収集、未発表作品の刊行、既に発表された作品の再版に力を注がれた。内容ごとに分類して様々な形で世に出され、女士は解説、紹介、序文などを寄せられ、またご自身の随筆も発表しておられる。大部分は『散記老舎』（北京十月出版社1986年）に見ることができる。私達が女士の文章によって知り得たことは少なくないのであって、老舎の文学研究に対する女士の貢献は非常に大きい。女士の文章は老舎や彼の作品に

対する敬愛の情、老舎の死に対する悲しみに溢れていて、読む者の胸を打つ。この間の詳細は「老舎」全2巻のVTRによっても知ることができる。第1巻の冒頭で、胡絮青女士がかなりの長時間にわたってインタビューに答えておられるのを実録してあり、ゆっくりと「地道」な北京話で老舎の思い出を切々と語っていらっしやる。老舎研究家及び老舎文学愛好者には必携の貴重な資料であろう（詳細は中山にお問い合わせください）。

女士は北京師範大学在学中、既に真社という文学グループに参加して「燕崖」のペンネームで自由詩や随筆を書き、「京報」副刊に掲載されたこともあると語られている（『老舎写作生涯』所収の王行之氏の「老舎夫人談老舎」では「燕岩」とする）。女士も五四新文学運動の影響を受けた文学女性であった。また幼少から中国画や書道を学ばれ、後年は齊白石画伯の弟子となられて、中国画家として数多くの作品を描いておられる。

1981年秋、学習研究社が『老舎小説全集』の出版を記念して、胡絮青女士と舒乙氏を日本に招請した。わずか一週間ほどのご滞在であったが、水上勉氏、開高健氏、城山三郎氏といった諸作家を交えた歓迎会が催された。水上氏は北京の老舎宅の庭に老舎お手植えの柿の木が2本あり、「丹柿小院」と呼ばれ親しまれていることを思い出して、わざわざ日本の柿をお土産にと持参された。女士もたいへんお喜びになり、その場を一段と暖かいものに盛り上げられたことも、今となっては懐かしい思い出である。平松は京都旅行にお供させていただいた。そのとき女士が、ひょうきんでかわいらしいおばあちゃまの一面も見せておられたのが非常に印象的であった。

九泉の下、老舎と再会されていることであろう。心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 北京の都市研究を通して 老舎作品を読む

大辻 富実住

これまで私は学士論文、修士論文で一貫して老舎の作品を扱ってきた。いずれも都市を作者や登場人物によって生きられた空間と認識し、作品のなかの都市に反映させた彼らの夢や欲望を分析することで、老舎が実生活で認識した都市を作品のなかでどのように反映し、それが作品のなかでどのような意味を持つのかを解明することを目標とした。その具体的作業として、まず学士論文では『駱駝祥子』以前の老舎初期の小説と散文を対象に、修士論文ではそれに加えて『龍鬚溝』『茶館』など戯曲も対象に、それぞれ作品中の北京像と当時の北京の実際の姿とを照らし合わせたくて、北京がどう描かれ、変化し、それが何を意味するのかを明らかにした。

初期の『離婚』などの作品と『駱駝祥子』における北京の描写を比較し、執筆場所という実際の老舎と北京の位置関係が、叙述内容にも影響を与えていたことを示唆した。また、小説に描かれた都市をその役割において居住地区・祝祭空間・商業地区・政治的な地区・境界などに細分化し、さまざまな資料を通して掘り起こした当時の生活状況や、実際にあった建築物なども照らし合わせながら、小説に巧みに盛り込まれた象徴性や細かい叙述に対する解釈なども指摘した。また、『駱駝祥子』から『四世同堂』にかけては、特に語彙の変化や、そこに描かれる交通や通信方法に注目し、老舎のまなざしが北京の内部から国家レベルに広がってゆくことが観察された。その背景として私は、老舎の抗日活動の経験とメディアの発達の影響を考えた。さらに均質化されつつある北京の都市空間を賛美する『龍鬚溝』と、双百運動の時期に

発表された『茶館』の北京に関する叙述の差異に、近代的にテクノロジーによって北京の自然が追いやられる姿を目の当たりにした老舎の心境の変化を跡付けることができる。

修士論文の後には老舎の北京以外の都市に対する描写を整理・分析して、彼の北京に対するまなざしを逆照射しようと試みた。しかし、各都市に関する描写を分析するためにはそれぞれ都市に関して個別に調査する時間的余裕がないため、不十分な結果に終わった。北京と他都市との描写の比較は今後の課題となっている。

現在私は 1949 年以降の老舎の作品と北京が首都として改造される過程の関心を持っており、特に政府の貧民救済や福利厚生の実業とそれによって作り上げられる人々の衛生観念の変遷に注目して、研究を進めている。しかし考察を進めていくうちに、当時の中国内外の状況も総合的に見直す必要性を感じたが、資料的制約もあってなかなか分析を深めることができない。この 9 月から留学するので、留学中にこの問題点に関しては積極的に解決しようと思っている。

また、将来的には老舎と同時期の作品や老舎以降の作家が描く北京との比較を通して、老舎の北京に対するまなざしの独自性や現在一般的に流通し消費されている北京のイメージが老舎の作品にどれほど影響を受けているのかなど、考察してゆきたい。

## 松島を詠じた老舎

花城 可裕

老舎が松島を訪れたのは、元禄二年五月九日に芭蕉がこの地を尋ねてから約三百年の後、一九六五年四月十八日のことであった。

松島といえば誰も「松島やああ松島や松島や」と言う句が想起されよう。老舎と共に来日した杜宣氏はこの時のことを「絶唱」という文章に次のように回想している。

その時我々に同行した日本の友人は言った。「日本の大詩人・芭蕉は松島の風景を敬慕し、松島に行って風景詩を書こうと思っていた。しかし、松島に来てみると、彼はただの一句も書けなかった。芭蕉は言った、『松島は松島である。詩にそれを表現する術はない』と」

(『老舎和朋友们』所収、一九九一年三聯書店)

この芭蕉の言葉の原文は「松島就是松島、詩無法来表達她」である。おそらく「松島や」の句を中国語に翻訳したものであろう。故・内田道夫教授は「中国作家代表团を仙台に迎えて」(『日中文化交流』No.94、一九六五年六月一日)なる文章に、

午後は特に代表団の希望で(中略)松島にむかった。曇り空ながら雙観山から松島の全景を見晴らし、芭蕉の「松島やああ松島や松島や」の句を紹介すると張光年さんは「わたくしも全く同じ気持です」とニコリされた。

と、書いている。老舎はこの逸話によほど興趣をそられたものと思しく、以下の詩を詠じている。

一湾三百島、島島鎖春煙。碧浪連滄海、横雲遮遠帆。松濤香雨后、鷗影亂風前。未敢題只字、芭蕉尊自然。

**訓読** 一湾 三百の島、島島 春煙鎖す。碧浪 滄海に連なり、横雲 遠帆を遮る。松濤 香雨の後、鷗影 亂風の前。未だ敢へて只字を題せざるは、芭蕉の自然を尊べばなり。

この詩は帰国後、郭沫若氏に贈った「遊日十七首」(十四題十七首)に収録されており(同年五

月四日附)、「松島湾」という題が付けられている。その後、老舎はこの詩を扇面に揮毫して杜宣氏にも贈っているが(翌六六年三月)、「碧浪」の句は「潮落帰滄海」に改められている。

しかしながら、芭蕉が句を吟じなかったというのにも拘わらず、「松島や」の句が残っているのはおかしなことである。そこで以下に、遼東の家の誇りは覚悟の上で、その間の事情を述べてみようと思う。

『おくのほそ道』(岩波文庫版)をひもといてみると、芭蕉は「抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の光景にして、凡、洞庭・西湖を恥ず。(中略)造化の天工、いずれの人か筆をふるい詞を尽さむ」と言い、同行の曾良の句を引いた後、「予は口をとちて眠らんとしていねられず」と言っている。つまり、『おくのほそ道』に「松島や」の句の記載はないのである。その上、蕉門の弟子・土芳もまた『三冊子』の「黒冊子」に「師のいはく、絶景にむかふ時は、うばはれて不叶、(中略)師、松島にて句なし。大切の事也」と言う。

では、「松島や」という句は如何なる素性のものなのであろうか。

それは、相模の田原坊なる人物の川柳「松嶋やさてまつしまや松嶋や」の「さて」が「ああ」に換えられ芭蕉の句として巷間に流布したものだと言われ、この川柳の文献上の初出は仙台の儒者・桜田虎門が文政四年(一八二一年)に刊行した『松島図誌』であると言う。(仁平道明「松島やああ松島や松島や」、『解釈』昭和六一年一月号)改めて見直せばこの句には季語がない。では、芭蕉は松島で句を吟じなかったのか、と云えばそうではない、やはり吟じていたのである。それは「島じまや千々にくだけて夏の海」という句であった。この句は『蕉翁文集』に載せられており、「書捨の中より見出して此に出し侍る」と附記されている。(岩波文庫『芭蕉俳句集』に拠る)

芭蕉はこの句に満足せず、芸術上の理由から捨ててしまったのであろう。

ところで今般、老舎が松島で前述の「松島湾」とは別の詩を口占していたことが判った。先に見た、内田教授の文章に以下の「昭和訓読」に拠る書き下しが紹介されていたのである。

仙境仙台あにいたずらに誇らんや、いくえの煙水いくえの花。ともに松島に遊んで情は海に同じ、中日の人民は一家に似たり。これを復文すれば以下の如くなるうか。

仙境仙台豈徒誇、幾重煙水幾重花。共遊松島情同海、中日人民似一家。

しかしながら老舎はこれを捨て、新たに「松島湾」という別の詩を詠じたのである。それは芸術上の理由からではなく、政治上の理由からであろう。その年の二月にはベトナム戦争が勃発しており、日米間には既に新安全保障条約が締結されていたのである。その上、当時の中国は文化面での政治的な締め付けが日に日に厳しくなっており、所謂「山雨来たらんと欲して風は楼に満つ」という状況にあった。仮令<sup>たとえ</sup>思ったとしても「中日 人民 一家に似たり」とはとも言えなかったのではなからうか。「遊日十七首」に収められた「仙台魯迅碑献花」詩の頸聯・尾聯からは、老舎がベトナム戦争に心を致していたことを伺い知ることができる。

紅白旗開敵敵我、軒轅血薦決雄雌。林邊東海潮仍急、忍聽荒城晚翠詞。

**訓読** 紅白の旗は開き、敵として我に敵し、軒轅に血を薦め 雄雌を決せんとす。林邊東海 潮 仍ほ急に、忍び聴く 荒城 晚翠の詞。

「紅白の旗」は星条旗・アメリカのことである。「軒轅に血を薦め」は魯迅の「自題小像」詩の「我 我が血を以て軒轅に薦めん」の句を用いたのである。軒轅は中国開闢の祖・黄帝の名、ここでは中国の義である。「東海 潮 仍ほ急に」は韋応物の「滁洲西澗」詩の「春潮 雨

を帯びて 晩来急に」の句を踏まえており、「国家に患難が多い」ことを言うのである。そして「荒城 晚翠の詞」は土井晚翠の「荒城の月」を、さらには白虎隊の自刃を言うのである。

と、ここまで書いて<sup>詩</sup>蔣と思った。老舎はこの時期、既に心に期する所があったのではないかと。そうではないとしたならば、この詩は所謂「詩讖」となったのである。老舎が憂国の情を懐きつつ、己の信念に殉じたのは、翌六六年八月二四日未明のことであった。

## 古書市の老舎のことなど

杉本達夫

昨年3月末から1年間、上海で暮らした。多くの方々に助けられて、快適な日々を過ごした。ありがたいことである。

20年以上も前に北京にいたころ、上海の上海書店から通信販売で抗日戦期の雑誌を買ったことがある。だが今回、上海書店の3階で、民国期の文芸書はないのかとたずねたところ、店員が一瞬あっけにと取られた表情をし、やがてゲラゲラ笑いだした。古書事情はほかの店でも同じで、およそ屋根のある店の古書コーナーに、手が出る品はまずなかった。滞在中に手に入れたわずかばかりの古書は、ほとんどが屋根のない場所、つまりは青空市や道端に出ていたものである。

上海一の雑踏の地「豫園」あたりから、細い路地をたどって西南方面に20分も歩くと「文廟」があって、その境内で日曜日ごとに古書市が催される。平日の観光客は10元払って中を見物するのであるが、日曜の古書市の客は1元だけ払って売場に入る。売場は20メートル四方もあるだろうか、6列に伸びた露店の平台にびっしりと書籍が並び、恐ろしいほどの人出

が通路を埋める。古書はしかしほとんどが建国後の出版であり、また、大量の新本を安売りする本屋も多い。いつのころからかわたしは、日曜ごととは言わぬまでも、足しげくここに通った。押されてはよろめき、人の肩越しに書名を読み、割り込んで本を手にとった。収穫があってもなくても、再び細道をたどって豫園近くに帰り、あるいは日本料理店で昼酒を飲んでうなぎを食い、あるいは屋上庭園で明清風の薨の波と、かなたに聳えるテレビ塔や超高層ビルを眺めつつ龍井茶を飲んだ。独居老人の花のない暮らしの中で、これはささやかな楽しみだった。

猛暑が和らぎはじめたころ、その古書市で老舎『四世同堂』のうち『惶惑』『偷生』、いずれも晨光版48年9月の4刷と、同じく晨光版48年9月2刷の『老張的哲学』、合計3冊を買った。『惶惑』も『偷生』も1冊本である。次の週には晨光版46年11月初刷の『偷生』上下と『惶惑』上を買った。値段は1冊本よりも上下に分かれた各1冊のほうがはるかに高かった。老舎のものではほかに『駱駝祥子』の、文化生活版48年3月の上海5刷と49年2月の上海8刷、『猫城記』の晨光版、47年の「改訂本初刷」を買っている。上海新象書店47年2月2刷の『老舎傑作選』（当代創作文庫）もあるが、これはいわゆる「盗版」であって、老舎のあずかり知らぬ出版である。

秋口の売場には、人ごみを撫でるようにして赤トンボが飛び交っていた。老舎ものをいくつか手に入れて、いささか気をよくしたが、しかし同じ品は二度と出なかったように思う。ほかの作家の小説や雑誌などを幾つか買ったこともあって、時おり若き書商が深夜に電話をよこし、「××××があるが要らないか」と知らせてくれたが、老舎ものはついそ含まれていなかった。たまたま出向いた日に、上記の本が売り出され、しかも誰にも買われず残っていたのは、やはり稀有なる僥倖と言わねばなるまい。

老舎関連の話題では、上海話劇芸術センターによる話劇『正紅旗下』の上演がある。同センター劇場ビルの落成を記念して、昨年12月末に上演された。北京人芸の李龍雲による脚本は相当に長く、上海での舞台はそれを2時間半に短縮していた。原作は冒頭8万字で中断したままであるが、李の脚本は未完の部分に想像力を差しのばして、八ヶ国連合軍の北京侵攻と老舎の父たちの戦い、武官たちの無能と気骨ある民衆の抵抗……を描き、かつ、老舎自身が語り手として、あるいは劇中人物として登場し、中国の歴史を問い、民族を問い、文化を問うしかけになっている。上演にかける同センターの意気込みが、事前に新聞で報道されたせいもあるのだろうか、わたしが見た日は満席で、百年も前の北京の物語に、上海の観客は長い長い拍手で応えた。なお、私自身は、せりふを情ないほどにしか聞き取れていない。

老舎関連の図書もまた、続々出版されており、たくさん頂戴している。

2001.6.24

## 老舎を読む会の4年半

稲田直樹

雑誌「中国語」で知り、平成9年1月から当会に出席し始めてもう4年半になろうとしている。参加当時は午前中「駱駝祥子」、午後は「四世同堂」を読んでおり、前者は既に3分の2を、後者は「惶惑」を半分位読み進んでいた。「祥子」は其の年末に読了したが、「四世同堂」は大作であり、結局今年1月にようやく講了となった。現在までの足取りを記録しておく、午前の部は「祥子」のあと「老張的哲学」（平成11.7講了）、「正紅旗下」（平成12.11講了）、現在は「牛天賜伝」を講読中。午後の部は、「四

世同堂」読了後、同作品のTV連続劇ビデオを2日かかりで鑑賞したあと、短篇「陽光」を読了し、現在は「我這一輩子」を講読中である。講義は全部中国語。質疑応答も含め日本語は使用されない。

私自身は外語大出身であるが、我々の時代にはこの様な授業はなく、外人教師の授業は初級会話だけであった。中山先生の理念に基づく此の方式は、ひたすら中国語をきくことと、作品の背景をなす風俗習慣、現地事情、中国人の考え方等に関する豊富な解説に接することに眼目がある。此の方式のおかげで、私は次のことを実感できた。一つは、講読が日本語なしなので、日本語訳ということに気にせず、中国文自体の理解に集中できることである。日本人の先生が日本語で説明する伝統的方式では、先生も生徒もひたすら中文を日本語に置き換えることに短絡してしまう。これと原文を深く理解することとは違う。もう一つは、我々が中文の原文を読む場合、常識判断に頼る部分があるが、彼我の文化、風俗習慣等の違いが邪魔して、正しい理解が案外できないことである。ネイティブの先生の解説で、エッと驚くことも多く、本当に正確な読みが難しいことを痛感させられる。

読了した作品の中では何と言っても「四世同堂」が規模壮大であり、この大作を今年1月遂に読み終えた時は、心中ひそかに感動を覚えた。北京解放の歓喜と、可憐な妞子の死と、祁家の英雄瑞全の凱旋とが時を同じくして起こり、獄舎から解放された錢詩人と祁老人が秋風の立つ胡同で対面する大団円は何度読んでも感動的で、シンフォニー的な迫力がある。鄭万鵬氏（北京語言文化大学）の近著「中国当代文学史」（2000年1月刊）の中で、同氏は「四世同堂」を、トルストイの「心理歴史小説」の流れをくむ「現代の叙事詩」と評価し、次の様に言っている。「四世同堂」は民族主義文学の最高

峰である。個人主義の文学、階級主義の文学を乗り越え、高度の民族主義を掲げて中国現代文学に対する一つの総括を行った、と。同氏は更に続けて、「四世同堂」に代表される民族主義文学が、新中国建国直後のつかの間の安定期が終わりを告げた後、長期にわたり階級主義の文学にとってかわられ、殊に文革が民族主義文学を圧殺したと指摘しておられる。

「正紅旗下」は、老舎の唯一の自伝的作品で、清朝末期の満洲旗人の生活がいきいきと描かれていて誠に面白い読み物であった。「四世同堂」と時代こそ異なるが、ここでも愛国的な民族主義者と、民族魂を喪失した売国奴の構図が表れていることに奇妙な感慨を覚える。私利私欲のために恥も外聞もなく、ひたすら外人牧師にすり寄り、利用しようとする多大爺は、「四世同堂」の冠曉荷や瑞豊や大赤包の先輩である。惜しいことに「正紅旗下」は話が正に佳境に入ったところで絶筆となった。老舎は一体、この後どの様に話を展開するつもりだったのだろうか。

今年3月に、老舎を読む会は発足から50周年を迎え、記念祝賀会が北京の中国对外友好協会講堂で盛大に行われた。老舎のご息子の舒乙氏が館長をしておられる中国現代文学館での昼食会には、老舎未亡人の胡絮青女士も、お元氣な姿を見せられた。遺憾なことに同女士は、去る5月21日肺炎で急逝されたとの悲報に接し、驚きと共に心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。

## 『老舎之死採訪実録』を読んで

杉野元子

『老舎之死採訪実録』（中国広播電視出版社、1999年12月）は、現代文学館副研究員傅光明

が、「老舎の死」を通し 20 世紀中国知識人の精神的根源を探ろうという意欲的な問題意識で 40 余人を対象におこなったインタビューの記録を中心に据え、一冊に編集したものである。本書は 3 つのセクションで構成されている。第 1 部分「親歴見聞」では、老舎の親族や北京市文聯関係者などによる自殺前後の老舎についての証言インタビューが主に集められている。第 2 部分「思考反省」では、解放後の老舎の創作活動や政治態度に対する評価、及び自殺の理由などについて、作家や研究者などにインタビューした結果が収録されている。なお第 1 部分と第 2 部分には、舒乙、林斤瀾、巴金、季羨林などが老舎について以前書いた文章も再録され、また第 3 部分「老舎筆下的水和死」には、老舎作品中における「水」と「死」に関連する描写部分が抄録されている。

傅光明のインタビューは 93 年から 99 年にかけておこなわれたが、胡絮青、冰心、蕭乾、曹禺、柯靈など現在では故人となった人々の発言や解放後に老舎と身近に接していた人々の回想も含まれていて、貴重な記録となっている。また解放後の老舎の足跡とその心理状態をどのように分析し評価するのかという傅光明の問いに対して、発言者が実に多岐に亘る見解を提出しており、解放後の老舎を研究することの難しさが浮き彫りになっている。本書についてはすでに杉本達夫による書評が本会報第 14 号に発表されているので、この書評では本書を読んで印象に残ったことを二点だけに絞って言及する。

#### ①証言内容の不整合

胡絮青と舒乙はそれぞれ老舎の自殺前後の状況について語っているが、内容に大きな食い違いが見られる。たとえば胡絮青は 93 年インタビューでは、8 月 24 日夜 11 時に電話がありトロリーバスで太平湖へ向かったと証言し、94 年インタビューでは、25 日午後に電話があり

バスで太平湖へ向かったと証言しているが、舒乙は 94 年インタビューで、25 日夜に母親が火葬場の車に乗って太平湖へ来て父親の遺体を引き取ったと証言している。またたとえば 93 年胡絮青インタビューでは、23 日深夜、老舎は自分の胸の内を口述し夫人に書き留めてもらい、24 日午前 3 時に舒乙がそれを周恩来のもとへ届けに行くと証言しているが、93 年舒乙インタビューでは、24 日午後に父親の血痕がついている布を腰に巻いて国务院へ行くと証言しているだけで、父親の口述文書については一切言及がない。

いっぽう 8 月 23 日に老舎が紅衛兵に糾弾される現場を目撃した人々の証言にも、大きな食い違いが見られる。たとえば当時文化局革命籌備委員会副主任をしていた葛献挺は、午後 3 時ころに電報大樓胡同から文化局の方に向かって歩いてくる老舎の姿を目にした文聯の運転手が、「あれが文聯最高権威の老舎だ」と明らかにしたため、紅衛兵が北京市文史館付近にいた老舎のもとに詰め寄り、文聯の中庭まで無理やり連行したと語っている。ところが当時文聯職員だった曹菲亜は、老舎は朝 8 時過ぎに文聯に到着、その後もずっとそこにいた、すると午後 2 時過ぎに紅衛兵が文聯中庭に押しつけてきて、大勢の有名人を攻撃目標として次々に引っぱり出した、老舎は最初中庭に立ってその様子をながめていたが、そのうちに老舎も引っぱり出された、と語っている。

これらの証言は老舎自殺から 30 年近くの年月を経た時点のものであるが、それにしてもこれほど大きな齟齬があるとは予想外であった。近年胡風事件、反右派闘争、文革などについての当事者による回想が盛んに発表されているが、これらの回想を読むときにも相当慎重にならなければならないことに思いを致さしめるものがある。また傅光明によると、老舎自殺後、専門の調査グループによって調査報告書が作



成されたものの、まだそれを閲覧することは不可だそうである。将来この書類が公開されれば、事態の究明が一気に進むものと期待される。

## ②解放後の老舎創作活動

解放後の老舎については、張鏗のように「解放後老舎は第二次創作絶頂期を迎え、すばらしい成果をおさめた」と高く評価する人がいるいっぽうで、柯靈や70年代生まれの匿名女性のように「解放後の作品は、『龍鬚溝』や『茶館』も含めてすべてのものが解放前より劣っている」と厳しい評価を下す人もいる。このように大きく評価が別れる中で、筆者は王元化と錢理群の発言に興味をもった。

王元化は解放後の老舎について、おそらく「解放後は何もかもが解放前よりもすばらしい」という新社会謳歌の意図を込めてすべての戯曲作品を書いたのだろうが、老舎には豊富な生活体験と独特で強烈な感受性が兼ね備わっているので、その豊かな才能が作者の意図を越えたところで無意識のうちに作品に表現されている、と評価する。錢理群は、老舎は40年代には国家存亡の危機を救い抗戦に貢献するために、50年代には民族解放の新時代到来を表現するために、小説ではなく戯曲や「快板」というスタイルを選んで執筆した、しかし老舎はこれらの作品は時が経てば価値を失ってしまう、やはり自分が熟知した題材を描かなければならないと悟るようになり、40年代には『四世同堂』を執筆し、50年代には、『茶館』と『正紅旗下』を執筆した、という見解を述べている。筆者は、50年代の老舎は、愛国者と芸術家という二つの立場を両立させるために悩み苦しんだ40年代と極めて類似した状況に置かれていたという錢理群発言、及び50年代以降の作品は新社会謳歌という主題に貫かれているものの、作者の非凡な才能が凡庸な主題を超越したところで発揮されているという王元化発言を、洞察力に富むものだと考える。

この他にも本書には、たとえば8月23日に文聯中庭で、「老舎は『駱駝祥子』の版權を外国に売り渡した」と告発し、老舎が紅衛兵から激しい暴力を受けるきっかけをつくったといわれている草明へのインタビューや、8月22日夜に老舎に呼ばれて老舎宅で長い会話を交わした黎丁へのインタビューなども収録されている。また舒乙は父親の遺体の腹部には水がたまっておらず、衣服も靴も濡れていなかったと証言しているが、傅光明は今埋め立てられた太平湖で小さい時に泳いだ経験のある人に偶然出会い、その人から太平湖の水際の水底には粘度の高い泥が積もっていたので、老舎は水際の泥中に頭を突っ込んだのだろうという説得力のある見解を引き出している。

以上紹介したように、老舎の死を基点に据えて各方面の人々にインタビューすることにより老舎像を捉え直そうとした傅光明の斬新な試みは、極めて有意義な結果をもたらしているといえる。本書は、今後の老舎研究における重要な基礎資料の一つとして価値を持ち続けることになるであろう。

## 史承鈞主編《簡明老舎詞典》

高橋 由利子

この書は簡明と題されているが、内容は実に詳細で専門的である。それにもかかわらず、コンパクトで読みやすいのは、本書の編集方針が明確であり、項目がよく整理されて分類されているためである。

また詞典とも題されているが、単に言葉の説明だけでなく、老舎研究に必要なあらゆる歴史背景が関係人物や出版物を含めて網羅されており、老舎という作家を世界と中国の文学史の中で縦糸と横糸の二つの方向から位置づけよ

うとする編者の工夫が見て取れる。この点において、本書は老舎研究者だけでなく近現代中国文学の研究者すべてにとって非常に有用な参考資料であるといえる。

一人の作家の参考辞典を作る時、編者はすべてこのような特徴を備えた辞典をめざすが、それはあくまで理想であって実現には非常な困難を伴う。編者がその困難を克服してこのような大著を完成されたことに深い感銘を覚える。

本書は以下の分類目録から成る：

一、生平史料

二、著译

(一) 小説 (二) 戏剧 (三) 散文  
(四) 诗歌 (五) 曲艺 (六) 文论及其他  
(七) 作品集

三、形象

四、人物

(一) 現代人物 (二) 古代人物

(三) 外国人物

五、文艺思潮和社团流派

(一) 文艺思潮、主张 (二) 文艺社团、流派

六、报章杂志和书籍作品

(一) 报章杂志 (二) 书籍作品

七、词语

八、老舎研究

(一) 研究著作及部分文章

(二) 传记、年谱及资料

(三) 重要研究机构及活动

以上、これらの分類目録からも本書の専門性と総合性が十分にわかるが、例えば、二、著译の中に老舎の色々な序文を項目として収めることや、すべてにその初出文献から後録文献までが詳しく書かれている点においても、単なる説明の域を越えた専門研究資料となっている。

またすべての項目について、最初に分類目録別の索引がついているだけでなく、最後に全書の総合索引がついているので、検索にも便利である。

ただ、このような辞典としてのすべての理想を実現した本書も、辞典そのものが完成に一定の時間を要するものである以上、編集と完成の間のタイムラグを避けることはできない。そのため、1998年10月10日(史承鈞氏の序文の日付)以降の成果が反映されていないところがある。例えば、一、生平史料の中の舒济氏は現在「老舎纪念馆」の館長であり、舒乙氏は「現代文学馆」の館長である。これらはこの二つの纪念馆と文学馆の項目と共に、将来補われることであろう。また、「老舎全集」や近年続々と出版されている参考書や研究書も将来補われることであろう。

しかしながら本書が今までの老舎研究の精華であり、現在までの老舎研究の成果を十二分に反映したものであることには変わりなく、内外の老舎研究者にとっては必携の基礎資料であり、必須の重要参考書として、これからの老舎研究に大きく貢献することが十分に期待できる。

## 膨大と細心の「老張的治学」

—張桂興《老舎研究叢書》を吹聴する—

日下恒夫

改革開放と歩を合わせるかのように、この十数年来中国における老舎研究の成果は目を見張るばかり。ことに90年代半ば以来、世界中にいる老舎の研究者と愛好家は、山東発のすばらしい贈り物を立て続けに手にすることになった。豪華な贈り物は「老舎研究叢書」、山東のサンタクロースは張桂興。

叢書は現在までに六種、七冊が公刊されている。壮観というほかない。

(1)《老舎旧体詩輯注》(1994. 6、中国礦業大学出版社、修訂本、2000. 9 中国国際

広播出版社)

- (2)《老舍与第二故郷》(2000. 9、青島海洋大学出版社)
- (3)《老舍年譜》上下冊(1997. 12、上海文藝出版社、修訂本未見)
- (4)《老舍資料考釈》(2000. 9、中国国際広播出版社)
- (5)《老舍著訳編目》(2000. 9 中国国際広播出版社)

以上 5 種の頂点に位置するものはもとより《老舍年譜》。他はいずれも年譜作成の調査研究の過程で生まれた副産物であり、いわば年譜の付録、あるいは年譜への「注釈」といってよい。だが生半可な副産物ではない。《老舍旧体詩輯注》の綿密、〈老舍の結社及任職考〉の徹底、また〈老舍の宗教情結考〉をはじめとする《老舍資料考釈》所収の各論考を一読すれば明らかのように、膨大な「注釈」自体が興味深い論考であり貴重な資料集になっており、《年譜》の姉妹篇と言うべきかもしれない。ただ少なくとも《老舍著訳編目》には索引がほしかった。これは中国書の常とはいえ美中不足。なお、以上のほかに、

- (6)《老舍文藝論集》(1999. 5、山東大学出版社)

もあるが、これは「山東大学文史書系」の一冊、老舍自身の著した作品論や文藝論の選集、〈老舍研究叢書〉の他書とは色合いが異なる。

とにかく、この豪華な大作群は、老舍という作家の人と文学の全体像をつかむための、現在のそみうる最高、最新、最大の基本図書となった。いずれも資料の博搜と持続の勤勉はもとより、方法の緻密、立論の細心、さらには嗅覚の鋭敏と執念の徹底が組み合わさって練り上げられた作品である。まさに、現場原本第一主義と目睹主義は、実事求是の模範であり書誌年譜作成の王道を歩む見本そのものである。この叢書の出現で、これまで 80 年代後半以降に陸続

と発表された幾多の年譜を一挙に凌駕してしまった。ことに老舍のもっとも豊かな山東時代に関して、これまでの年譜に物足りなさを感じていた者にとっては、この膨大な情報と詳細な新事実満載の《年譜》と《老舍与第二故郷》所収の文章によって、これまでの渇を十二分に癒されることになった。

思えば私もかつて「老舍小説全集」(学研)で年譜作成を試みた。はじめは先人の成果を譲り受け形ばかりの追加を加えれば一丁上がりと考えていたが、仕事を始めてみると先行する参考資料は皆無、本当に何もなかった！今となれば嘘のような話だが、そんな年譜が 83 年から数年のうちにはもっとも詳細な年譜だったのだ。その後、資料や事実の発見、発掘、発表が驚嘆すべき速さで進み、あっという間にわが作品は「過時了」、お役御免。実は中国で出版する話があり翻訳も出来上がっていたのだがお断りした。もう十五年も昔の話。

そんな二十年昔と比べて、今の老舍研究者や愛好者はなんと幸せか、この叢書を手にしさえすれば老舍の事跡に関して研究現況が把握できるのだ。

ところで、日本でもこれまで多くの老舍に関する研究発表が行われてきたが、それには老舍研究会の存在も大きい。一作家の研究会がこれほど長く続いているのは慶賀すべきことである。しかしいささかの不満もなかったわけではない。老舍の生涯や研究史に関する知識がかならずしもみんなに共有されているとは限らなかったのだ。なかには唯我独尊式研究発表のあったことも否定できない。これはなにも日本人についてのみ言っているのではない。

だが、これからはそうはいかない。少なくとも張氏の仕事を踏まえたいうて語る必要がある。といっても何も難しいことではない。この長城のように巨大な「老張的叢書」は、昔のように来るものを拒む長城ではなく、文字通りあ

ふれる知識と情報を、読者にやさしく与えてくれる長城なのだから。

さて、何ごとにつけ資料というものは、収集は面倒、整理は厄介、さらなる困難は公刊。それにもかかわらず、かかる仕事を継続する氏の精神をどう呼べばいいのか。ひたすら研究のため、人のために尽くす飽くことなき収集と調査への邁進ぶりは、私たち誰もが知っている言葉でいえば「舍予精神」の発露というのがふさわしい。なによりもまず私たちは、氏のこの徹底した研究態度と一連の仕事にたいして、深い感謝と敬意を示さなければならない。

もともと、この張桂興氏は想像を絶する「とことん、徹底」の人。おそらく原稿脱稿の日から、さらなる資料を求めて日々倦むことなく精進を続けておられるのであろう。きけば、「老舎全集」の補正も近く公刊されるとのこと。老舎研究にとってもっとも根本的な資料、すなわち依拠すべき信頼できる本文を提供してくれるものに違いない。これも我々が鶴首するものである。

ただ《年譜》のような書物は、時の経過とともにいつかは過去のものになるという宿命がある。いかに徹底、綿密な仕事でも人のすること、不足や勘違いはありうる。読者とりわけ若い人たちは、この巨冊をじゅうぶん批判的に熟読し、錯誤を正し、不足を補う努力を続けるべきである。そうすることが、氏の学恩に対する最大の感謝というものだからである。

といいながら、実は私はまだじゅうぶんにこれらの叢書のすべてを熟読、精査したわけではない。巨冊の群を前に、今はもう圧倒されているばかりなのである。なのに大いに吹聴する気になったのは、年譜、評伝、資料考釈といった基礎的で地道な仕事に対して、世の研究者と称する人々がやや冷淡であるように思えるからである。もともと、そういう人に限って、こっそり部屋の中で有用な箇所を、みずからの研究

に供するべくメモにとっているに違いないのだ。それなら大いに称えるがよい、声を極めて誉めればよい。

そういうわけで、ともに1945年11月生まれ、年譜作成、《猫城記》研究という三つの縁ある者として、「老張的治学」を吹聴する筆をとった次第。

なお、蛇足一言。老舎研究の「労働模範張桂興」の奮闘ぶりに感心しているうちに、つぎの文字が浮かんできた。

博搜文字求甚解、辛勤輯佚思舍予

## 老舎関係文献略目（4）

倉橋 幸彦

【1996年補】

川西政明「北京」

『わが幻の国』講談社

(11月30日) p.371-377

\* (一) で、老舎の死と「四世同堂」に言及。

【1997年補】

釜屋 修「無米之炊 — 大阪外語と青春の思い出」

『TONGXUE トンシュエ』（同学社）

第13号（1月20日）p.3-6

→同学社編集部編『TONGXUE トンシュエ 総輯号』（2001年5月30日）p.308-331

\*「秋に外語祭があり各国語劇を原語で上演する。／翌五八年は自分たちの出番、老舎に手紙を出し『茶館』上演許可を戴いた。本文は『祭』の冊子に残っているが肝腎の肉筆は失くなり、手元に老舎の手書きの封筒だけが残っている。私は演出、神戸の華僑連誼会を大勢招待、ハラハラしながら袖から覗く。紙銭を捲くシーンで最前列の華僑老婦人がハン

ケチを取り出してくれてホッとした。本邦初演だった。」

稲葉康生「作家、老舎：中国文革で非業の死  
日本のカンパで家、復原へ」『毎日  
新聞夕刊（東京）』

8月28日、(4)

\*カット写真（「老舎」、「老舎が亡くなるま  
で16年間住んでいた北京市内の家」）

【1998年】

杉本達夫「胡絮青夫人の決断」

『東亜』〔霞山会〕（1月）

〈ずいひつ〉p.8-9

\*「老舎の仕事を考えるとき、わたしはいつも  
胡絮青夫人を想起する。とりわけ日中戦争時  
の、その後の老舎を決定づけたひとつの決断  
を考えるとき、夫人があつてはじめて老舎の  
業績がありえたのだと、つくづく思うのであ  
る。」

\*胡絮青（署名は燕崖）「北平から重慶」（『時  
与潮文藝』三巻一期）に言及。

杉本達夫「書画を頂戴するはなし」

『TONGXUE トンシュエ』（同学社）

第15号（2月10日）p.5-6

→同学社編集部編『TONGXUE トンシュエ  
綜輯号』（2001年5月30日）p.373-374

\*「胡夫人とは老舎が結ぶ縁で、長く厚誼を得  
ている。夫人は齊白石について学んだ人で、  
北京画院の長老である。齢九十を越えたいま、  
制作のほうはどうなのだろう。〔☆「胡老」  
は本年5月逝去、享年96歳。〕最近は子息舒  
乙氏（中国現代文学館）が母の業まで引き継  
いだか、国画を発表しはじめたらしい。」

藤野 彰「死選んだ国民作家〔20世紀どんな  
時代だったのか 34 中国革命文化

大革命④〕」

『讀賣新聞』2月23日、(8)→『20世紀  
どんな時代だったのか 革命編』

（1998年9月30日、読売新聞社）

p.184-187

\*「父の死後、当局からペン、眼鏡などの遺品  
は返却された。でも、あの紙だけは見せても  
らうこともかなわなかった。紙には毛主席の  
詩だけでなく、父の何らかの言葉が記されて  
いたはずだ。最後の一日、父の手元には紙と  
ペンがあり、思索の時間もあった。作家たる  
者が自らの言葉を書き残さないということは  
あり得ない。」（舒乙）

渡辺武秀「老舎『牛天賜伝』試論」

『八戸工業大学紀要』第17巻（2月）

p.273-288

高橋由利子「〔精読〕老舎《老張的哲学》（ラオ・  
チャンの哲学）」

第1回『中国語』第459号（3月15日）

p.64-66

第2回『中国語』第460号（4月15日）

p.64-66

第3回『中国語』第461号（5月15日）

p.64-66

第4回『中国語』第462号（6月15日）

p.64-66

多田正子『ビデオ《老舎》全二巻 解説並イン  
タビュー記録の日本語訳』

（6月 非売品）30頁

李 慶国「老舎の心の原風景—北京の中国近現  
代文学地図(1)—」

『アジア観光学年報』（追手門大学文  
学部アジア文科学科）創刊号（6月）

\*未見

弓削俊洋「老舍の相声—相声論及び技法に関する考察」  
『愛媛大学法文学部論集人文科学編』  
第6号

\*未見

妹尾達彦「〔北京〕〔中国学最前線〕」  
『月刊しにか』(大修館書店) Vol.9/  
No.7 (7月1日) p.126-127

\*冒頭に、市川宏・杉本達夫訳「駱駝祥子」の  
一段を引用。

『老舍研究会会報』第12号(7月22日)  
▲杉本達夫「会の灯をともし続けたい」p.1/平  
松圭子・櫻井龍彦「柴垣芳太郎先生を追悼し  
て」p.1-2/無署名「第1回研究会(1984)よ  
り第14回(1997)までテーマと発表者」p.2  
-4/倉橋幸彦「老舍関係文献略目(1)」p.4  
-6/花城可裕「第六次全国老舍学術討論会」  
について」p.6-8/〔東京、関西の老舍読書会  
について〕中山時子「老舍を読む会の活動に  
ついて」p.8、藤井栄三郎「関西地区老舍研究  
会の月例研究輪読会」p.9/杉本達夫「老舍短  
信」p.10

弓削俊洋「建国後の老舍に関する考察—「歌德  
派」作家の実像を求めて」  
『愛媛大学法文学部論集人文科学編』  
第7号

\*未見

山田忠司「北京語における「給」の発達につい  
て—『红楼梦』、『儿女英雄传』、老  
舍作品をめぐって—」  
『大阪産業大学論集 人文科学編』96  
(10月15日) p.51-61

→(中文)「关于北京话虚词“给”的演变—『红  
楼梦』、『儿女英雄传』、老舍作品的比

较—」  
『范畴语法论集』(范畴语法研究会)  
No.1 (8月15日)  
p.74-79

郭 春貴「我的母亲」  
『現代中国著名作家散文選』(副題[現  
代中国文学への道])  
(10月30日 白帝社) p.75-85

\*「作者紹介」「解説」「語句」

緒方 昭「老舍文学と民族芸術：話劇の中の曲  
芸について」  
『二松学舎大学人文論叢』61(10月)  
p.22-49

山田忠司「機能語“給”の用法について—老  
舍作品をコーパスとして—」  
『中国言語文化論叢』〔東京外国語大  
学中国言語文化研究会〕第2集  
(11月30日) p.55-79

杉本達夫「牠・他・它—「微神」のなかのある  
代名詞について」  
『蘆田孝昭教授退休記念論文集 二  
三十年代中国と東西文芸』(12月12  
日、東方書店) p.275-285

杉本達夫「老舍在抗戰文學運動中所起的作用  
(中文)」  
『中國語文論叢』15輯(12月)  
p.177-190

杉本達夫「抗日戦期の老舍と胡絮青夫人」  
『中国文学研究』24(12月)  
p.94-105

【1999年】

弓削俊洋「老舎と“包袱” — 「ふろしき」から「ギャグ」まで—

『TONGXUE トンシュエ』(同学社)

第 17 号 (2 月 10 日) p.17-18

→ 同学社編集部編『TONGXUE トンシュエ 綜輯号』(2001 年 5 月 30 日) p.436-437

杉野元子「老舎生誕一〇〇周年記念関連行事について〔レポート〕」

『月刊中国図書』(内山書店)

第 11 巻第 4 号 (4 月 1 日) p.15-17

緑 楊「老舎生誕百年を記念して」

『人民中国』5 月号 (5 月 5 日)

p.22-26

\* 「今回開かれた老舎国際シンポジウムには、各国から質の高い論文が提出されたが、これは老舎の国際的影響の大きさと、国外の老舎研究が高いレベルにあることを証明している。出席した学者は実に流暢な漢語を口にしていたが、それは恐らく、長年老舎の研究に携わってきたゆえんかもしれない。また老舎式のユーモアが幾度も聞かれ、会場からは常に爆笑が起こっていた。ロシアのサンテペテルブルグ大学のスクーリン教授の論文には拍手や笑い声が絶えず、日本老舎研究会の会長で、早稲田大学の杉本達夫教授も絶妙な言葉を連発し、出席者は笑いをこらえ切れないようだった。／会場で人目を引いたのは、中山時子女史を団長とする三十五人の訪中団だった。多くが老舎読書会のメンバーで、女性が大半を占めているようだ。杉本教授によれば、老舎は作品の中で多くの能力ある善良な女性のイメージを創造したことから、日本では「娘子軍」(女性部隊)が老舎研究の主力になっているという。「娘子軍」は内外の出席者から拍手をもってむかえられた。」

〈編者の独り言〉「スクーリン (漢字表記: 司

格林) 教授ですか、ああなんとお懐かしい。もう十数年前、編者が北京留学していたおり、ちょうど司格林さんも一時北京大学に滞在されており、北京大学の汪景寿先生 (編者の指導教授) と司格林さん、そして編者は何度か食事を供にし、連れ立って劇場 (寄席) へも通った仲間 (厚かましい?) だったのである。入学試験業務でやむなきことながら、この老舎国際シンポジウムに参加できなかったのは、ああ残念無念。」

『岩波 現代中国事典』(5 月 20 日)

浅野純一「老舎」p.1319-1320

吉田富夫「茶館」p.786

鈴木明『新「南京大虐殺」のまぼろし』

(6 月 3 日、飛鳥新社)

\* 著書鈴木明は「老舎の熱烈なファン」であり、「あまり小説好きではない僕でも、その代表作『駱駝祥子』は珍しく何回も読んだ作品である」(p.497) と言う。ただし、次のような老舎に対する誤解も散見される。「中国近代文学で、誰もが認める巨匠は、オックスフォード大学出身の作家・老舎」(p.48)「中国作家協会などの要職にあったにもかかわらず、“反右派闘争”、“文化大革命”などではげしく批判され絶望のあまり北京大学の池に身を投げて自殺した。紅衛兵に殺された、という説も根強くあり、いまでもその真相は明らかにされていない」(p.49)

沈延太・王長青「四合院にそれぞれの余生 地名に歴史あり 朝陽門界限〔胡同の四季⑩〕」

『人民中国』6 月号 (6 月 5 日)

p.86-89

\* 「私たちは南小街を通り、盛房胡同の南から向春胡同に入る。訪れたのは輪タク業の劉来

福さんの家。／劉さんは今年六十五歳、もとはさる工場の労働者だったが、定年で辞めてからは長男の劉永利さんといっしょに家業の輪タクに励んでいる。／話が輪タクになると、劉さんの口はとたんに滑らかになった。／「わたしゃね、昔は人力車やってたんだ。あの老舎先生にもずいぶんかわいがられたもんだ。昔の北平の六国飯店とか北京飯店の前で人力車引いてる男ってのが、先生の小説に出てくるでしょ。あれはうちのおやじなんかモデルになってるんですぜ。」

杉本達夫「怒れるや」

『朝日新聞（東京）夕刊』7月13日  
〈一語一会〉

\*老舎の死に言及。

『老舎研究会会報』第13号（7月21日）

▲伊藤敬一「老舎の作品の三つの舞台公演を見て」p.1-4／布施直子「『99 老舎誕生一百周年国際学術研討会』報告」p.4-6／杉野元子「老舎記念館について」p.6-7／岡田祥子「老舎と冰心の三人の子ども」p.7-8、平松圭子「牛島徳次先生を追悼して」p.8-9／\*上記二点には、「老舎夫妻、子息や娘さんと親交のあった謝冰心女史が99歳の長寿を全うされた。日本では中国語学の立場から老舎の作品を研究しておられた牛島徳次先生が、すべてを語りつくし思い残すことはないと言いの〔こ〕されて（夫人談）急逝なさった。ここに小文を寄せてお二人への追悼の意としたい。」と「事務局」のことわりを付す。／〔老舎研究書の紹介〕杉本達夫「舒乙著『我的思念』（中国広播電視出版社）」p.9-10、高橋由利子「关纪新『老舎評伝』」p.10-11、平松圭子「老舎研究の為の三種の工具書」p.11-12／渡辺武秀『『老舎新論』（王晓琴著）について』p.12-13／倉橋幸彦「老舎関係文献目録(2)」p.13-15

林田重五郎「駱駝祥子 老舎〔中国〕北京には、ラクダどころか人力車さえも見当たらない」

朝日新聞社編『世界名作文庫の旅下』（朝日文庫）

（8月1日）p.209-217

△初出：『朝日新聞（日曜版）』

1965年5月23日、(17)

\*見出「今は昔、かわる北京」

△単行本：『世界名作の旅 下』

〔朝日選書〕1988年6月

\*「日本を出る前、出来れば作者〔老舎〕に会いたいと会見を申込んでおいた。北京に着いて聞くと、日本へ出かける準備で忙しいとのことだった。／そのあとを追うようにして、わたしたちの観光団も帰国したが、望みがかなって、会えたところは、京都のホテルだった。／訪日の世話をした日中文化交流協会では、「中国の谷崎潤一郎」と紹介したそうであるが、その作風と、会見した感じからいうと、「中国の獅子文六」の方が適当なように思える。／やや白い顔色の、おだやかな人間である。」

沈延太・王長青「皇帝、芸人、書画家……護国寺近辺の思いでの人びと〔胡同の四季⑭〕」

『人民中国』8月号（8月5日）

p.86-89

高橋 均「牛島徳次先生を思う」

『トンシュエ』（同学社）第18号

（9月20日）p.16-17

→同学社編集部編『TONGXUE トンシュエ 綜輯号』（2001年5月30日）p.460-461

\*「昭和30年という年は私にとって初めて中国語と出会った年であったが、その年が牛島先生にとって初めて「北京語」を陳東海先生



について習い始めた年であるとは、その当時知る由もなかった。／それからの十年間は、ほぼ私が東京教育大学に学部生、大学院生として在籍した時期と重なる。そして、この間の牛島先生の「中国語演習」などの授業で使われたテキストは、「駱駝祥子」「龍鬚溝」「茶館」「紅大院」「全家福」など老舎の作品が多く、これらの作品はいずれも先生が陳先生から「北京語」を学んだ時のテキストであった、……。／今でもカルチャーショックとして記憶していることは、「龍鬚溝」がテキストとして使われた時であった。下調べしようとしてもまったく手がでないのである。それまでに私が習ってきた中国語とはまったく違い、辞典もまったく役に立たない。倉石先生の「岩波中国語辞典」もまだ無い時代である。授業は、結局陳先生吹き込みのテープを聞き、牛島先生の説明、講義というかたちで終始したように記憶している。」

岩村康生「編集後記」

『トンシュエ』（同学社）第18号  
（9月20日）p.18

→同学社編集部編『TONGXUE トンシュエ  
綜輯号』（2001年5月30日）p.462

\*「老舎故居復原に賛助する会」と「老舎研究  
に精魂傾けた学者」牛島徳次先生の逝去に言  
及。

日下恒夫「“你好”に関する三つの疑惑」

〔ことばのエッセイ〕  
『TECC mate 《交流》 JIAOLIU』  
（ベネッセコーポレーション）  
第3号（9月30日）p.2-3

\*“你好”が「中国製……の、歴史ある言葉」  
であることを証明する一例として、『茶館』  
第2幕の一段を引く。

沈延太・王長青「名士の旧居をたずねて（下）  
老舎と梅蘭芳と齊白石と〔胡同の四季⑩〕」

『人民中国』10月号（10月5日）  
p.86-89

\*“小羊圈胡同”にあった老舎の生家に言及。

張佐良／早坂義征訳「老舎の死」

『周恩来・最後の十年』（10月22日、  
日本経済新聞社）第二部 嵐来る  
p.164-173

中山時子監修 齊霞監訳 老舎を読む会訳『老  
舎幽默詩文集』

（11月1日、叢文社）499頁

\*舒濟編『老舎幽默詩文集』（1992年10月、  
海南出版社）の日記。

【書評】川西政明『老舎幽默詩文集 — 笑わ  
れて愛される中国人 — 』

〔味読・愛読文學界図書室〕  
『文學界』（文藝春秋）第54巻  
第2号（2000年2月1日）  
p.330-332

芝木邦夫「老舎・その人と作品 — 生誕100年  
に寄せて」

『月刊しにか』（大修館書店）Vol.10  
／No.12（11月1日）p.102-107

平松圭子「「月牙兒」の版本比較」

『東洋研究』（大東文化大学）  
第134号（12月25日）p.1-13

利波雄一「二人の舒舎予」

『中国近現代文化研究』（中国近現代  
文化研究会）第2号（12月25日）  
p.58-72

\*「拙稿では、この時期〔一九二〇年代 前半〕に『礼拝六』、『申報』の「自由談」などに現れる「舒舍予」、「舍予」という名の執筆者が老舎か否かという問題を含めて、当時の文壇の状況を人物関係を中心に眺めてみたい。」

◆この問題については、曾広燦が早くに「关于老舎的笔名」(『老舎研究資料』1985・7、北京十月文艺出版社、所収)で言及しているが、利波論文では、これには一切触れていない。

杉本達夫「老舎故居復元を賛助する会」の活動と老舎記念館について」

『(東京・北京友好都市提携 20 周年記念事業) 次世代型市民交流を考える集い 報告書』

(東京都生活文化局国際部交流推進室) (12 月) p.33-36

中山時子「北京市(中国)との市民交流の課題と展望」

『 // 』(12 月) p.73-87

\*「老舎を読む会」の歴史を紹介。

## 老舎研究会会報

(自第 1 号至第 14 号) 掲載目録

第 1 号 (1984 年 3 月)

胡絮青女士・舒乙氏：祝辞と詩

致日本老舎研究会成立大会

老舎研究会の発足に当たって 柴垣芳太郎

老舎研究会会則

第一回研究発表会記事

第 2 号 (1984 年 12 月)

鐘敬文教授より贈られた漢俳四句

一贈別日本老舎著作愛好者第三次訪華団諸君一

第 2 次老舎学術検論会に参加して

柴垣芳太郎

中国側の発表

高橋由利子

日本側の発表

藤井栄三郎

老舎の思い出

肖 伯青

老舎の街 北京

戸村 祐美

訪中日誌

小林 康則

事務局だより

第 3 号 (1985 年 7 月)

舒庆春等毕业生纪念母校校长的石碑发现记

舒 乙

南开大学曾广灿教授よりの書信

老舎資料近刊 (1984 年 85 年 日本、中国)

事務局だより

第 4 号 (1985 年 12 月)

老舎のもうひとつの著作—『言語声片』

日下 恒夫

老舎文学の原点—「小人物自述」

倉橋 幸彦

老舎資料近刊 (2)

【1984 年、85 年追加、85 年 (2)】

老舎資料近刊補正(第 3 号所収分について)

倉橋 幸彦

事務局だより

第 5 号 (1986 年 6 月)

第 3 次老舎学術討論会

平松 圭子

感想(同上について)

杉本 達夫

第 3 次老舎学術討論会参加日誌

小林 康則

香港「老舎專題討論会」に参加して

藤井栄三郎

老舎と盲芸人

剛 振華

老舎幽默詩文集—「不遠千里而來」と二、三の

作品

金森由美子

老舎資料近刊 (3) 新入手資料、【1984 年追加

(2)、1985 年(3)、1986 年】

事務局だより

第6号(1987年4月)

北京土産話 柴垣芳太郎  
「茶館」舞台上演の言語 岡部 謙治  
老舎資料近刊(4)【1984年追加(3)、1985年追加  
(3)、1986年追加、1986年(2)】  
昭和61年度研究発表会・総会報告  
老舎研究会会則  
事務局だより

第7号(1988年7月)

曾広燦氏を迎えて  
(東京における講演報告) 平松 圭子  
(関西における講演報告) 小林 康則  
『老舎与中国文化概念』序 胡絮青・舒乙  
事務局だより

第8号(1989年3月)

老舎誕生九十周年記念の夕べに参加して  
丁 秀山  
ある噂—竹中伸訳『駱駝祥子』をめぐって  
日下 恒夫  
老舎資料近刊(5)  
【1986年追加、1987年、1988年】  
事務局だより

第9号(1989年7月)

第四次老舎学術討論会について 杉野 元子  
同上参加記録 小林 康則  
老舎資料近刊(6)【1987年追加、1988年追加、  
1989年】

第10号(1990年4月)

舒済女士の二つの研究発表 平松 圭子  
老舎資料的新发现 舒 乙  
舒乙氏夫妻来日 平松 圭子  
老舎作品の最も早い翻訳 福 康

老舎資料近刊(6)【1987年追加(2)、1988年追加  
(2)、1989年(3)】

事務局だより

第11号(1991年7月)

介绍北京老舎研究会开展活动的一些情况  
甘 海嵐  
『老舎事典』を読んで 伊藤 敬一  
1991年春、北京—祥子の道と老舎の原景—  
日下 恒夫・倉橋 幸彦  
事務局だより

第12号(1998年7月)

会の灯をともし続けたい 杉本 達夫  
柴垣芳太郎先生を追悼して(一) 平松 圭子  
(二) 桜井 龍彦  
第1回研究会(1984)より第14回までテーマ  
と発表者  
老舎関係文献略目(1) 倉橋 幸彦  
「第六次全国老舎学術討論会」について  
花城 可裕  
老舎を読む会の活動について 中山 時子  
関西地区老舎研究会の月例研究輪読会  
藤井栄三郎  
老舎短信 杉本 達夫  
事務局だより

第13号(1999年7月)

老舎の作品の三つの舞台公演を見て  
一、北京曲劇「茶館」  
二、現代京劇「駱駝祥子」  
三、村歌劇「拉郎配」 伊藤 敬一  
「'99老舎誕生一百周年国際学術研討会」報告  
布施 直子  
「老舎記念館」について 杉野 元子  
老舎と冰心の三人の子ども 岡田 祥子  
牛島徳次先生を追悼して 平松 圭子  
老舎研究書の紹介

舒乙著『我的思念』 杉本 達夫  
关纪新著『老舍評伝』 高橋由利子  
老舍研究の為の三種の工具書

張桂兴著『老舍旧体詩輯注』『老舍年譜』  
『老舍資料老舍考釈』 平松 圭子  
王曉琴著『老舍新論』 渡辺 武秀  
老舍関係文献目録(2)【1994年、1995年】  
倉橋 幸彦  
事務局だより

第14号(2000年7月)  
『老舍文学詞典』を読んで 藤井栄三郎  
死から浮かび上がるもろもろの事  
傅光明編『老舍之死採訪実録』について  
杉本 達夫  
英語訳『丁』について 布施 直子  
世紀末中国における老舍 杉野 元子  
老舍の短篇小説 門田 康宏  
老舍関係文献目録(3)  
【1995年補、1996年、1997年】  
倉橋 幸彦  
趙清閣女士逝く 平松 圭子  
事務局だより

## 事務局便り

◇2000年度大会は7月28日に、早稲田大学で開催されました。発表者とテーマは次の通りです。

南雲 大悟：丁聡の挿絵からみる老舍小説  
大辻富実佳：老舍研究における都市と文学  
谷川 毅：老舍最後の声音  
李 玉敬：正紅旗下の旗人

◇2001年4月より、老舍研究会事務局は大東文化大学から早稲田大学へ交替となりました。

◇渡辺安代会員が2001年5月1日、55歳で病没されました。同会員は研究会の母体である老舍愛好者訪中団のメンバーでもあり、老舍《小鈴儿》について(1983)、老舍とキリスト教(1983、高橋と共著)、老舍《神拳》について(1987)等の論文で一貫して旗人としての老舍の葛藤を追求しました。最近、許瑞宗氏から送られてきた老舍生誕百年記念国際学会(1999. 2. 北京)のスナップ写真に彼女の笑顔を偲びつつ、心からご冥福をお祈りします。(高橋由利子)

◇老舍や老舍の作品に関連するエッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちしています。奮ってご投稿下さい。

◇今号の編集についても、執筆者各位にご無理をお願いしました。また編集をお手伝いいただいた早稲田大学大学院生の方々、そして好文出版にも、心より感謝申し上げます。

老舍研究会会報第15号(2001年7月27日)  
〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1  
早稲田大学文学部2407(高屋)研究室内  
老舍研究会事務局  
TEL: 03-5286-3702(中国文学専修室)  
FAX: 03-3203-7718(文学部代表)